

ある自然保護運動の記録

ユネスコ・エコパークとなった
宮崎県綾町の森①

どうなる「日本一の照葉樹林」と「自然重視のモデル町」(特別編)

ドキュメント写真家

早川文象

日本一の貴重な照葉樹林に高圧送電線の鉄塔が建つ——環境や景観に重大な影響を及ぼす建設計画を阻止しようと立ち上がった宮崎県綾町の人々の運動は、「森を守る」という理念のもとに、曲折を経てひとつの「ゴール」に辿り着いた。綾町の照葉樹林は今年、ユネスコの「エコパーク」に登録されたのだ。運動の当初から綾町に通い、本誌で経緯を報じ続けた早川文象氏が、あらためてその十年余の道筋を辿り直す。

実質は日本初の「エコパーク」

九月一日、宮崎県綾町——。

この町が擁する日本最大規模の照葉樹林が今年、ユネスコエコパークに登録され、それを祝う「綾ユネス

コエコパーク登録記念式典」が、町の公民館文化ホールで行なわれた。

式典では、ホールをほぼ満席にした町民の前に、オープニングで笙が演奏された。そのしとやかな音色は森を吹き渡る風を思わせ、陽に映える樹々の輝き、枝葉の優美な揺らめきを連想させたが、東京から駆けつけた私は、それを聞きながら同時に別の感慨が湧き上がってくるのを感じていた。この十年ほどの間に綾の森をめぐって起きたさまざまな出来事が脳裏をよぎり、そこに流れた「時間」の波間を漂うような感覚にさせられていたのだ。

*

●はやかわ・ぶんぞう 一九六四年千葉県生まれ。法政大学卒。海外取材の後、雲仙普賢岳災害を長年取材し、二〇〇〇年以降送電鉄塔建設問題を宮崎県綾町に取材し、本誌に発表し続けた。また諫早湾の干拓問題も長年取材している。

綾町は、宮崎市の西、車で四〇五分ほどの距離にある農業と観光の小さな町だ。自然重視の町づくりを推し進め、「日本の名水百選」「水源の森百選」などにも選ばれた。いまは、年間七十五万人が訪れる観光スポットとなっている。

だが、かつては林業で栄えながらも、戦後の機械化によって林業は衰退し、日本中が高度経済成長で豊かになっていく中で、夜逃げの町とさえ言われるまでになってしまった歴史を持つ。

その綾町を復活させ、現在の町の基礎を作ったのは、まだ自然が売り物になるなどとは思っても寄らなかつた時代に、あえて「ふるりの森を残そう」と決意したリーダー、郷田實・前町長(故人)だった。

郷田氏は、有機農業という言葉がまだ世間に浸透していなかったころ、

他に先駆けて町の有機農産物をブランド化し、町づくりに活かしたことで全国的に知られる人だが、当時は綾の森が町の財産として、いや、日本の財産として世界的に認知されることになろうなどは、誰にも予想し得なかったことだろう。そう思うと、この郷田氏の先見性は計り知れない。

照葉樹林は、シイ、タブ、カシ、クスなどの常緑広葉樹が混生する樹林で、かつては西日本一帯に広い範囲で広がっていた。それが、乱伐や開発などで減少し、いまや現存する森では、綾町に残る照葉樹林が、日本一の規模を誇る形になってしまった。また、この綾の森は「東アジア照葉樹林帯」の北限にあたり、多くの日本固有種がみられることから、植物学的にもきわめて貴重な場所となっている。